

し、初めは「やんだなあ」と断わろうとしたが、根が親孝行の息子なのでこの婆さんがかわいそうになって、いわれるままに背中や頭や首のしらみをとったんだとお。すると婆さんは「若いもの、ほうびをくれるからついでにせ。」そう言っただけでまた歩きだしたんだとお。息子がついてゆくと、山の奥に大きな家が見えだし、そこがお婆さんの住居だったとお。お婆さんは金のさかづきを奥の座敷からもってきて、息子にくれて「なあ若いもの、お前の親切のごほうびにこのさかづきをくれるでなあ。何でもほしいものがあつたら、さかづきをふせてふれ。」そういって婆が見えなくなつたとお。不思議に思つて家に帰つてから、そのさかづきをふせてほしいものを願つたら、目の前にもりもりとそのほしいものが出てきたとお。神様だったんべなあ。

### 親孝行の息子のはなし ②

むかしむかし、伝願坊というたいそう親孝行の息子がいたんだとお。父親が病氣になつて、薬を手に入れようと遠いところまで出かけて、それを買つてきて服用させるやら、うまいという食べものはどんなに高価でも買つてきて、料理して食べさせていたんだとお。だが父親の病氣はなかなかよくならずに、からだはやせるし氣力も衰えてくる。もうどうしようもなくおろおろするばかりだったんだとお。そうしたなかで、父親はたけのこを食べたいといいだし、まだ春の彼岸前で家の者は困りきつてしまつたんだとお。息子はそのとき、「とにかく竹やぶへいって堀ってみべい。」と、まだ雪のどつきりあるやぶの雪をかきわけかきわけ、唐鍬で竹の根を堀り始めたんだとお。ところが不思議にも、その堀つたところに、よきによきとたけのこが出ていて、びっくりしたんだとお。息子の孝心の深いのに神様は願いをかなえて下さつたのだと、もつぱらうわさだつたんだとお。